The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第二次世界大戦後の日本における少年赤十字の復興
Author(s)	ベレジコワ，タチアナ
Citation	日本語・日本文化. 2020, 47, p. 67-79
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75880
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

第二次世界大戦後の日本における少年赤十字の復興

ベレジコワ・タチアナ

はじめに

第一次世界大戦中、赤十字という人道団体の下部組織として発足した少年赤十字は、戦傷兵、戦病兵や戦争孤児などの救済、公共施設の復興と整備の支援に努めた。当初、主にアメリカやカナダを中心に展開していた少年赤十字の運動は、徐々に世界各国へと拡大していったが、終戦後は、活動を平時に沿ったものに改める必要性が生じた。様々な模索の結果、少年赤十字の指導者は、「健康の保持と促進」、「社会奉仕」、「国際理解と親善」を三つの目標として定めた。この三つ目の目標は、「国際通信交換」という活動を通じて実現された。「全世界に於ける少年赤十字の小国民は、互に連絡して、（中略）偏見を除去し、又は偏見の生ずる源を防止し、（中略）且彼等が相互に尊敬すべき深き理由を」[1] 理解するというように、この活動は高い期待を寄せられたものであり、その意義も世界各国において提唱されたのである。

そして、1922 年に創立された日本少年赤十字は、上記の三つの目標に沿った活動を展開していった。そのなかでも、通信物を通じた世界各国との国際通信交換は、日本の子どもたちにとって、異文化に触れる機会となり、親善の思いを伝えるきっかけとなった。他国との交流は、日本とそのほかの国の子どもたちに、お互いを「丁度お隣りにお住みのやうな気」にさせて、「いつまでも仲よしのお友達で」、「お互ひに少年赤十字団員として活動し、海を隔てて友情の花を咲か」せる感情を植えつけたものとして高く評価された [2]。

日本の団員たちは、1923 年に国際通信交換を始めて以来、他国の子どもたちと、交換アルバムや手工芸品、人形など、多くのものを交換していった。そのな

かでも、人形交流は、重要な活動として位置付けられ、徐々に発達していったこと、人形は、単なる子どものおもちゃというより、日本文化を象徴するものとして考えられ、約 20 年間、各国の子どもたちの間で交換されたことが、筆者の調査によって明らかになった。日本の人形は、新年やクリスマスの贈物、通信交換品、風俗や習慣を紹介する教育資料などとして、また「親善大使」として、世界各国へ発送されていたのである。その答礼品として、外国から数多くの人形が届けられ、団員たちと指導者、そして一般の人にも、世界各国の文化に触れる機会を与えたことが、今までの調査過程において明確になった。

戦前の日本少年赤十字の機関誌には、団員たちの国際人形交流に関する多くの記述が残され、その数と内容から考えると、団員と指導者にとって、外国と人形を交換することは非常に重要な活動であったことがうかがえる。しかし、日本少年赤十字の活動を取り上げる先行研究はわずかであり、日本少年赤十字の国際人形交流に関しても、断片的な紹介や指摘はなされているものの、まだ不明な点が多々残されているのである [3)]。

本研究は、日本少年赤十字の歴史と国際人形交流に注目したものであるが、一連の拙稿において日本少年赤十字の誕生と国際人形交流の始まり [4)]、そして人形交流の発展と人形が果たした文化的役割を論じてきた [5)]。ただ、今までの研究成果は、第二次世界大戦の勃発以前の期間に注目したものであり、終戦後の交流について論じていない。したがって、本稿では、1940 年代後半～ 1970 年代における日本少年赤十字 [6)] の復興、そして国際人形交流の実態を、戦前の状況と比較しながら、明らかにしたい。とりわけ、第二次世界大戦の終戦後、少年赤十字の規模と国際交流の範囲がどのように変わったのか、そして少年赤十字の団員たちは国際人形交流を続けていたかどうかという二つの点が、本稿の一つ目と二つ目の問いである。さらに、もし戦後においても国際人形交流が行われたのであれば、戦前の交流と比べて何らかの違いがあったのか、なかったのか、この点が本稿の三つ目の問いである。この三つの問いに答えることによって、日本少年赤十字の歴史と国際人形交流史の新たな側面、そして日本人形が果たした文化的役割がより明らかになるだろう。

こうした問いに答えるため、本稿では二種の一次資料を使用した。一つ目は、

1948 年以降、日本少年赤十字の機関誌として発行された二つの雑誌である。それは、子ども向けの『青少年赤十字』（1949 年～現在、年 6 回刊行）と、指導者向けの『青少年赤十字指導情報』（1948 年～現在、年 6 回刊行）である。二つ目は、1943 ～ 75 年のアメリカ少年赤十字の機関誌である。とりわけ、小学生向けの *American Junior Red Cross News*（月刊発行）と中学生向けの *The American Junior Red Cross Journal*（月刊発行）である。両雑誌とも、第二次世界大戦の勃発以前から刊行された英語雑誌である。さらに、補助資料として、1924 ～ 43 年に発行された日本少年赤十字の機関誌[7]を用いた。

また、日本少年赤十字の第二次世界大戦後の活動に関しては、従来の新年やクリスマスの贈物交換や展覧会の継続が望ましいという山本孫義による記述[8]と、交換アルバムを作成する際、雛祭りや雛人形に関する文や絵を参考試案として挙げている橋本祐子による記述が見られる[9]。ただ、これらの資料には、国際交流の必要性についての提案は紹介されているものの、それが実際に行われたかどうかに関する記述や分析は皆無である。つまり、今も戦後の日本少年赤十字の復興と国際人形交流の実態は不明瞭のままである。

なお、本稿の引用は、読みやすさを考慮して必要な箇所以外はふりがな（ルビ）と記号を省き、二字以上の繰り返し記号に該当する箇所にはそれに相当する文字を当てたほか、漢字を通用するものに改めたことをあらかじめ断っておく。

では、第二次世界大戦後、日本少年赤十字はどのように再スタートを迎えたのか、その活動の内容と規模を、まずは把握しなければならない。次章では戦前と戦後の状況を比較しながら、それを見てみよう。

1. 少年赤十字の復興

1920 ～ 40 年代において、日本少年赤十字は、アメリカに次いで世界二位の団員数を誇っていた。1922 年の創立以降、その発展は目覚ましいものであった。1927 年には 100 万人に達した日本少年赤十字の団員数は、1934 年になると、200 万人を超え、2 年後には、300 万人を突破したのである。当時の小学校と中学校の総数に占める割合を計算すると、1935 年には約 30%、1940 年には約 40%の小学校と中学校が少年赤十字に加盟していたことがわかる[10]。

ただ、戦後になると、団員数が大幅に減少する。現在までに収集したデータ（1946 ～ 75 年）によると、1974 年になると、団員の総数が 100 万人に達したが、この数字を 1935 年の活動のピークと比較すると、戦後において団員数が大幅に下がったことがわかる。そして小中高校の総数に占める割合は、1940 年の 40％に対して、1964 年には、約 10％である [11)]。つまり、戦後の日本少年赤十字の運動は戦前と比べて、その規模は格段に縮小したのがわかる（図 1）。その理由は正確にはわからないが、終戦後の混乱の時期において、資金の問題や校舎の破壊や併合などで、団員数が格段に減ったのではないかと考えられる。

図1：日本少年赤十字の団員数（1922 ～ 1975 年）[12)]

ちなみに、成立のときから日本少年赤十字の最大の交流相手国であったアメリカの場合は、どうだったのだろう。戦前のアメリカ少年赤十字の団員数は世界一位であったが、その数の増減は著しかった。ただ、最も少ない時でも 400 万人を下回ることはなかったという [13)]。もう少し具体的にいうと、1920 年、第一次世界大戦の最中には、団員数が、1100 万人に上り、同時期に活躍した少年少女団体のなかで、最も多かった。たとえば、同時期のボーイスカウトの団員数は 200 万人（アメリカ国内外の団を含めて）、ガールスカウトは 6 万人、キャンプ・ファイヤ・ガールズは 10 万人であったという [14)]。そして、第二次世界大戦後は、1965 年には約 1830 万人 [15)]、1966 年には約 1800 万人 [16)] であり、アメリカ少年

赤十字は、第二次世界大戦後でも世界一位を保持し続けていたのである。

では、日本少年赤十字の国際交流の範囲は、どうだったのだろう。1924 年には、相手国がわずか 7 カ国であったが、1929 年になると、その数は 33 カ国まで増加し、最盛期の 1935 年には南北アメリカ、ヨーロッパ諸国、アジアなどの約 40 カ国もの国々や地域が日本との交流に参加していた [17)]。この隆盛は、戦後になっても続いていく。たとえば、1960 年代、少年赤十字が設立されていた国の数は 100 カ国に及び [18)]、そのなかで、日本は 50 カ国以上の国と交流を行っていた。そして、戦前と同様に、アメリカとの交流の回数は最も多く、アメリカの団員たちは最大の交流相手であった。つまり、戦後になって、少年赤十字の団員数が大きく減ったものの、幅広い国際交流が続けられていたことがわかる。そして、活動も、戦前に定められた三つの目標に則したものであり、交換アルバムなどを通じた国際通信交換も継続されていたのである。では、戦前の国際通信交換において重要な位置を占めていた国際人形交流はどうなったのだろう。これについては、次章で見てみよう。

2. 国際人形交流の再スタート

日本少年赤十字が国際通信交換に参加したのは、1923 年のことであった [19)]。そして、人形に関する最初の記述は、1925 年の資料に見られる。この記事には、ホノルルから送られた慰問品のリストが載っている。そのなかには、人形や玩具も入っている [20)]。そして、1926 年になると、人形は、通信交換品として日本から贈られるようになった。これ以降、日本から外国の子どもたちへ贈られる人形の数が徐々に増えていく。日本の人形は、外国の学校や展覧会で展示され、珍しく、美しいものとして高く評価されていたことが、これまでの筆者の調査によって明らかになっている。日本人形は、「全く素晴らしい出来栄えで、そのまま最高の芸術品」と好評を博したという [21)]。

特に 1930 年代は、国際人形交流が目覚ましい発展を見せた時期であった。1938 年の日本とアメリカの機関誌に、「人形の交換を余り拡大してはならない」という注意喚起が掲載されるほど、国際人形交流が盛んになったのである [22)]。この時期には、子どもたちが、「遠国異郷に於ける友人の風貌、衣服が珍らしく

面白いので、各国独特の衣服を纏へる人形の交換」を活発に行なっていた[23]。

ただし、第二次世界大戦の勃発後、欧米との交流が中断されてしまい、1942年には、満州国、中華民国、タイなどへ人形を贈る計画は、最後になったと推測できる[24]。これ以降は、人形交流が一時的に中断されることになった。

戦争が終わると、日本少年赤十字は復活し、機関誌の発行も、国際通信交換の活動も、再スタートを迎える。そして、しばらくすると、終戦後の最初の人形親善使節が外国へ発送される。それは1950年のことであった。その時、「アイルランド、トルコ、南阿連邦、南米その他で催される教育展や人形展へと親善の人形使節が旅立つことになつた」という[25]。少し具体的にいうと、アイルランドへの人形使節は、コーク市（アイルランド南部にある都市）のユニバーシティー・カレジで開かれた夏季講習会に当たって贈られたものであった。その時、アイルランドから世界各国へポスター、人形、手工芸品が依頼され、日本少年赤十字の団員は、北海道の共立女子高校生による「立派な八重垣姫の人形」を始め、多く作品を贈ったのである[26]。

また、トルコへの親善人形使節はイスタンブールで開催された博覧会へ贈られたものであった。この展覧会では、赤新月[27]の特別室が設けられたので、そこで展示するための人形が各国に依頼された。日本からは、東京の頌栄女子高校生による「藤娘の人形」を始め、様々な人形が贈られたという[28]。

そして、それ以降の使節は、どうだろう。1951～52年には、アメリカ、デンマーク、チェコ、ノルウェー、イタリア、タイ、インド、パキスタン、琉球などへ国際親善人形使節（合計34体）が、フィリピンへは日比親善人形使節（合計6868体）が、発送されたという記録がある[29]。なお、別の資料によると、団員たちは、人形だけではなく、人形、玩具、絵画、合わせて6868点の贈物を作成・収集し、贈ったという[30]。これらの使節に関する情報が少なく、贈物に関する詳細、発送の動機や評価などが機関誌において記載されていないため、正確にはわからない。ただ、1952年は、日本独立の年であり、その理由で多くの国へ親善の人形が贈られたと推測できる。

戦後において日本から贈られた人形は、一方的に贈られたもののほかに、交換されたものもあった。たとえば、1954年にパキスタンへ贈られた人形は、パキ

スタンからの人形の返礼品であったという[31]。そして、1971 年に日本と各国の間で 9 体の人形が交換されたという報告がある[32]。

ちなみに、アメリカ少年赤十字の機関誌にも、日本から贈られた人形についての記録が残っている。具体的にいうと、1951 年[33]、1952 年[34]、1962 年[35]、1966 年[36] には、日本から人形が贈られたという。

アメリカ少年赤十字の機関誌にも、詳しい情報がほとんど掲載されておらず、日本と交換された人形、また一方的に贈られた人形に関する詳細がわからないことが多い。ただ、アメリカの機関誌において記載されている情報によると、多くの場合は、日本の人形が、アメリカからのクリスマスのギフトボックスへの返礼品、あるいはアメリカの人形との交換品として贈られたことがわかる。そして、1966 年以降の号には日本からの人形贈呈や交流に関する記述は見られないことも確認できる。これ以降、人形の交換が行われなくなったのか、あるいは、人形が交換されたものの、報告が掲載されなかったのか、現時点では正確にはわからない。

以上のように、戦前と戦後の国際人形交流の実態を比較すると、戦前に続き戦後においても日本人形は、「親善大使」、教育資料、そして展示品として外国へ贈られていたことがわかった。ただ、戦後の機関誌においては、人形に関する記述や写真が少なくなり、人形贈呈の動機や目的、評価、時には贈られた人形の種類さえも記載されないケースが多く見受けられる。そのため、当時の実態が把握しにくくなっている。

おわりに

以上述べてきたように、第二次世界大戦後になっても、日本少年赤十字の国際人形交流はしばらくの間、続いていたことがわかった。少年赤十字の機関誌において、1950 年以降、欧米諸国やアジア諸国への親善人形使節や人形贈呈の事例が確認できる。つまり、少年赤十字の団員たちによる国際人形交流は戦後においても継続され、少なくとも 1970 年代まで、約 20 年間以上も続いていたことがわかる。

しかし、交流の内容と頻度は、戦前と少し異なるものであったことも明らかに

なった。日本とアメリカで発行された少年赤十字の機関誌の内容から考えると、戦後になると、人形に対する少年赤十字の団員と指導者の関心が徐々に低下していったと思われる。人形が発送される事例がだんだん少なくなっていくとともに、紹介も簡略化され、1970 年代になると、贈られた人形の数の報告だけが掲載されることになった。

実際、この時期には、交換アルバムのほうが多く発送されていたことが、機関誌の内容から確認できる。交換アルバムの方が、人形よりも作成しやすく、海外へ発送しやすい。また、クラス全員で作成できるので、国際交流に適した手段であると団員と指導者たちが思うようになったのかもしれない。戦前は、各種の交流品（アルバム、手工芸品、人形など）に関する注意点が雑誌に掲載されていた。それに対し、戦後は、交換アルバム作成時の注意点や、受領・発送の報告だけが載せられるようになった。

さらに、戦後は、子どもたちの外国への訪問の数も増えていく。海外旅行が安価で、楽になっていくとともに、人形を贈るよりは、外国を実際に訪れ、あるいは外国から子どもたちを受け入れることを通じて、国際交流を行うことに重きが置かれるようになったのかもしれない。このように、戦前、異文化を紹介する役割を担っていた人形が、戦後になると、交換アルバムや実際の子どもたちの訪問へと代わった点が、最も大きく変化した点と言えよう。

ところで、国際人形交流への関心は、ほかの国の場合は、どうだったのだろう。以下、アメリカの場合を見ておこう。民族衣装の人形を交換する習慣は、日本と同様にアメリカにおいてもしばらく続く。その際に、贈られた人形の数は確認できないが、交流の範囲は、ある程度把握できる。1940 年代後半から 1960 年代にかけては、アメリカの団員たちが、ポーランド[37)]、ギリシア[38)]、チェコスロバキア[39)]、フランス[40)]、ベルギーとノルウェー[41)]、ブラジルと南アフリカ[42)]、日本と、人形を交換していたことがわかっている。ただ、日本と同様に、アメリカにおいても、交流の範囲が広かったにもかかわらず、1970 年代になると、この習慣は徐々になくなっていったようだ。その理由には、日本と同じように、海外旅行の自由化とそれに伴う機会の増加、人形よりも交換アルバムへの関心の高まり、さらにはテレビを始めとする視覚的なメディアの発達などがあったかもし

れない。いずれにせよ、人形贈呈の回数の低下は日本特有の傾向ではなかったと思われる。

付記

本研究は科学研究費助成事業（若手研究）課題番号：19K13318 の助成を受けたものである。

注

1）「少年赤十字に就て」『海外少年赤十字彙報』第 3 号、日本赤十字社、1928 年、pp.1-8。

2）「アメリカから」『少年赤十字＝ The Japan Junior Red Cross』第 12 巻第 1 号、日本赤十字社、1937 年、pp.19-20.

3）たとえば、桝居孝による一連の研究には、機関誌『少年赤十字』が誕生した時代や雑誌の発行に関わった人物については、『雑誌『少年赤十字』と絵本画家　岡本帰一』（竹林館、2002 年）、そして近代日本における国際理解教育や交換アルバムについては、「大正期・昭和初期の国際理解教育―1920 年代～ 30 年代の「少年赤十字」の国際交流活動―」（『戦争と平和 : 大阪国際平和研究所紀要』第 12 号、大阪国際平和センター、2003 年、pp.73-86）というものが挙げられる。

4）ベレジコワ・タチアナ「日本少年赤十字の国際人形交流（一）―国際通信交換から国際人形交流まで―」『人形玩具研究 : かたち・あそび : 日本人形玩具学会会誌』第 28 号、日本人形玩具学会誌編集委員会、2018 年、pp. 161-171.

5）ベレジコワ・タチアナ「日本少年赤十字の国際人形交流（二）―国際人形交流の展開と文化的役割―」『人形玩具研究 : かたち・あそび : 日本人形玩具学会会誌』第 28 号、日本人形玩具学会誌編集委員会、2018 年、pp.172-182.

6）1934 年に日本少年赤十字は「日本青少年赤十字」に改名された。なお、本稿においては、日本少年赤十字と統一する。

7）具体的には、子ども向けに発行された『少年赤十字 =The Japan Junior Red Cross』（日本少年赤十字の機関誌：1926 ～ 43 年、季刊発行）と、『少年赤十字 =The Kyoto Junior Red Cross』（京都支部の機関誌：1924 ～ 34 年〈以降未詳〉、月刊発行）、そして指導者向けに発行された『海外少年赤十字彙報』（1928 ～ 42 年、季刊発行）。

8）山本孫義『青少年赤十字教育の原理と実践』教育出版社営業部、1949 年、p.152.

9）橋本祐子『青少年赤十字の歴史と組織と活動』日本赤十字社青少年課、1955 年、p.16.

10）これらの数字は、日本近代教育史事典編集委員会編『日本近代教育史事典』（平凡社、

1971 年、p.80）を参照にして、計算したものである。

11）「青少年赤十字加盟校・学級および生徒（団員）数」『青少年赤十字指導情報』第 37 号、日本赤十字社青少年課、1965 年、p. 10.

12）この図は、筆者が以下の資料のもとに作成したものである。日本赤十字社編『日本赤十字社史続稿』下巻（日本赤十字社、1929 年、pp.1003-1004）；日本赤十字社編『日本赤十字社史続稿』第 4 巻（日本赤十字社、1957 年、pp.5-15）；日本赤十字社編『日本赤十字社社史稿』第 5 巻（日本赤十字社、1969 年、p.270）；日本赤十字社編『日本赤十字社社史稿』第 6 巻（日本赤十字社、1972 年、pp.5-14）；日本赤十字社編『日本赤十字社社史稿』第 7 巻（日本赤十字社、1986 年、p.14）；日本赤十字社編『日本赤十字社社史稿』第 8 巻（日本赤十字社、1988 年、p.12）；赤十字社編『事業年報』（日本赤十字社、1943 年、p.26）；赤十字社編『事業年報』（日本赤十字社、1944 年、p.17）；赤十字社編『事業年報』（日本赤十字社、1945 年、p.20）。

13）Irwin, Julia F. “Teaching ‘Americanism with a World Perspective’: The Junior Red Cross in the U.S. Schools from1917 to the 1920s.” *History of Education Quarterly*, vol. 53, no. 3, Cambridge: Cambridge University Press, 2013, p. 258.

14）これらの数字は、以下の二つのものを参考にしてまとめたものである。一つ目は、Little, Branden による “A Child’s Army of Millions: The American Junior Red Cross.” (*Children’s Literature and Culture of the First World War*. New York: Routledge, Taylor & Francis Group, 2016, Kindle edition, pp.283-300)、そして二つ目は、前掲の Irwin, Julia F. (pp.255-279) である。

15）「各国赤十字社々員数」『青少年赤十字指導情報』第 43 号、日本赤十字社青少年課、1968 年、p.14.

16）「世界の JRC メンバー」『青少年赤十字指導情報』第 45 号、日本赤十字社青少年課、1969 年、p.15.

17）前掲桝居「大正期・昭和初期の国際理解教育―1920 年代～ 30 年代の「少年赤十字」の国際交流活動―」、pp.73-86.

18）「各国赤十字社々員数」前掲、pp.11-14.

19）「日本少年赤十字国際通信交換状況一覧」『少年赤十字＝ The Japan Junior Red Cross』第 15 巻第 2 号、日本赤十字社、1940 年、p.21.

20）Upjohn, Anna Milo. “Boxes of Gifts for Japan.” *American Junior Red Cross News*, vol.7, no.4, Washington: American Junior Red Cross, Dec.1925, p.80.

21）「フランス少年赤十字主催の人形展覧会」『少年赤十字 =The Japan Junior Red Cross』第 10 巻第 3 号、日本赤十字社、1935 年、pp.15-16.

22）「通信交換に関する注意」『海外少年赤十字彙報』第 45 号、日本赤十字社、1938 年、pp.44-45.

23）「民衆芸術と少年赤十字」『海外少年赤十字彙報』第 18 号、日本赤十字社、1931 年、

pp.2-6.

24）「共栄圏のお友達へ」『少年赤十字＝ The Japan Junior Red Cross』第 18 巻第 1 号、日本赤十字社、1943 年、口絵。

25）「人形使節海を渡る」『青少年赤十字指導情報』第四号、日本赤十字社青少年課、1950 年、p.7.

26）「アイルランドへ人形使節」『青少年赤十字』第 10 号、日本赤十字社青少年赤十字課、1950 年、p.37.

27）イスラム教国では、宗教的な理由から十字ではなく、赤新月の標章を使っている。そのため、組織名は「赤新月社 (Red Crescent Society)」となっている。

28）「トルコの博覧会へ日本人形を」『青少年赤十字』第 10 号、日本赤十字社青少年赤十字課、1950 年、p.38.

29）「昭和二十六年度の本社行事報告」『青少年赤十字指導情報』第 6 号、日本赤十字社青少年課、1952 年、p.9.

30）「フィリピンへ贈りもの」『日本赤十字社社史稿』第六巻、日本赤十字社、1972 年、p.370.

31）「パキスタンから送りもの」『青少年赤十字』第 50 号、日本赤十字社青少年課、1954 年、p.6.

32）“International Friendship Exchanges”『青少年赤十字指導情報』第 55 号、日本赤十字社青少年課、1973 年、pp.30-31.

33）“Making New Friend through School Correspondence.” *The American Junior Red Cross News*, vol.32, no.8, Washington: American National Red Cross, May 1951, p.16.

34）“Gifts from Other Lands.” *The American Junior Red Cross News*, vol. 28, no. 6, Washington: American National Red Cross, Apr. 1952, p.29.

35）“A Far Traveler.” *The American Junior Red Cross News*, vol. 42, no. 7, Washington: American National Red Cross, Apr. 1962, p.23.

36）“A School to School Reply.” *The American Junior Red Cross News*, vol. 47, no. 6, Washington: American National Red Cross, Mar. 1966, p.13.

37）“Greeting from Poland.” *The American Junior Red Cross News*, vol. 28, no. 3, Washington: American National Red Cross, Dec. 1946, back cover illustration.

38）“From the Land of the Greeks.” *The American Junior Red Cross News*, vol.29, no.8, Washington: American National Red Cross, May. 1948, p.10.

39）“Bride Doll from Czechoslovakia.” *The American Junior Red Cross News*, vol.30, no.3, Washington: American National Red Cross, Dec. 1948, p.27.

40）“Paper Dolls from France.” *The American Junior Red Cross News*, vol.31, no.5, Washington: American National Red Cross, Feb. 1950, p.15.

41）“Neighbor to Neighbor.” *The American Junior Red Cross News*, vol.33, no.4, Washington:

American National Red Cross, Feb. 1952, p.2.
42）“All Dolled Up.” *The American Junior Red Cross News*, vol.41, no.4, Washington: American National Red Cross, Jan. 1960, pp.22-23.

〈キーワード〉 少年赤十字、国際通信交換、国際人形交流、人形

The Japanese Junior Red Cross after the Second World War

BEREZIKOVA Tatiana

The Junior Red Cross was established after the First World War and very soon became one of the most recognizable organizations for children in the world. Its main goals – promotion of health, work for community and international friendliness – were shared by many children and adults and were considered as a way to create a peaceful world for future generations. The Japanese Junior Red Cross – established in 1922 – very soon became the second largest Junior Red Cross organization in the world after the American Junior Red Cross, and put a lot of effort into development of international friendliness with children from different countries through exchanges of albums, dolls, etc. After the beginning of the Second World War the activities of the Japanese Junior Red Cross, including international exchanges, were temporarily ceased for almost 8 years.

This paper explores how the activities of the Japanese Junior Red Cross were restarted after the end of the Second World War, namely it focuses on membership and range of international exchanges comparing to the prewar period, and traces the history of postwar international doll exchanges until the 1970s.

The research revealed that the membership declined significantly right after the Second World War, but gradually recovered during the period from the 1950s to the 1970s, yet it did not reach the prewar level of the 1930s. Simultaneously the range of international exchanges remained almost the same. Exchanges of dolls recommenced during the 1950s, but the number of dolls and frequency of exchanges declined comparing to the 1930s.